

# 第1回「論語ということば」

\*\*\*

はじめに。

発音・アクセント。

参考とする本の紹介。

講義

加地伸行

「論語指導士」養成講座 第1回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

株式会社フジテレビ KIDS 東京都港区台場 2-4-8

## 【はじめに】

みなさん、こんにちは。これから論語の講義を始めます。

この講義は単なる講義ではありません。

この講義を受講なさった方が、将来「論語指導士」という資格をもって、活動なさることができるようになられています。

今回は『論語』という「ことば」の読み方、意味についてお話したいと思います。

それは実はアクセントが大きく関わっています。そのアクセントについてお話ししましょう。

## 【発音・アクセント】

大体大きく分けて、我々が使っている日本語は、東日本を中心とする地域の方々のアクセントと、西日本、関西を中心とする地方のアクセントは、違っていることが多い。

色で申しますと、関東は「あ<sup>ゝ</sup>か」「く<sup>ゝ</sup>ろ」「あ<sup>ゝ</sup>お」「し<sup>ゝ</sup>ろ」、はじめの音にアクセントが置かれています。

ところが関西の人はまったく逆です。「あ<sup>ゝ</sup>か」「く<sup>ゝ</sup>ろ」「あ<sup>ゝ</sup>お」「し<sup>ゝ</sup>ろ」。

しかし聞いている人は、いくらアクセントが違っていてもわかるのです。

日本語のアクセントは、外国のことばのように、アクセントが違ったら、聞き取りにくいということはありません。ですから、どちらのアクセントでもよい。

大体わかるというところが日本語の気楽なところでしょう。

さらに「春夏秋冬」。関東では「は<sup>ゝ</sup>る」「な<sup>ゝ</sup>つ」「あ<sup>ゝ</sup>き」「ふ<sup>ゝ</sup>ゆ」。

関西では全く逆で「は<sup>ゝ</sup>る」「な<sup>ゝ</sup>つ」「あ<sup>ゝ</sup>き」「ふ<sup>ゝ</sup>ゆ」です。

仮に、ごっちゃになっても、日本語の場合は、そんなに不自由さは感じません。

あまりアクセントのことは気にしなくていいでしょう。

しかし、ときにはことばによっては意味が全く異なることがあります。

「いじょう」これはアクセントが違くと、意味が全く変わってしまいます。

例えば「私の報告は<sup>✓</sup>以上です」。話がそこで終わるといことです。

ところがアクセントを違えるととんでもないことになります。「私の報告は<sup>✓</sup>異常です」  
このように意味が変ることばには気を付けましょう。

この、意味が変わるといことが『論語』の読み方に関わってきます。

まず『論語』というふたつの漢字。

私の知っている限り、日本人はいろいろな読み方をしています。

『<sup>✓</sup>論語』。論を高く読む人もいます。或いはお尻を少し上げて『<sup>✓</sup>論語』と読む人もいます。  
(どちらにもアクセントを置かず平らに『論語』と読む人もいます)

関東の人は『<sup>✓</sup>論語』と読む人が多いのではないのでしょうか。

関西の人は『<sup>✓</sup>論語』と読む人が多いようです。

読み方は入り乱れており、どのような読み方をするかは決まっておらず、いろいろな読み方を  
します。我々はあまり気にせずに、別に不思議さも感じません。

ところがこれを中国語で読むとすると、どうなるか。

中国人は『論語』という場合に限って、特別な読み方をします。

【中国における『論語』の発音】

まず、「論」という文字の意味ですが、「討論」「議論」。これは「<sup>✓</sup>討論」「<sup>✓</sup>議論」と、上から  
下へ読みます。「討論」「議論」の「論」はあれこれ言う、あれこれあげつらうという意味です。

中国語では“lun”（<sup>✓</sup>ルン）と読みます、上から下へ“lun”。ところが『論語』という本に  
限って、“lun”を下から上に向かって（<sup>✓</sup>ルン）と読みます。（<sup>✓</sup>ルン）と読む中国人がいたと

したら、よほどものを知らない人です。

中国語ではお尻を上げて読みます。お尻を上げた読み方をするのは、どういう意味かという、それは「倫」です。

「倫」は中国語で“ lun ”（ルン）と読みます。

すなわち中国では『論語』の場合の「論」を「倫」の意味にとって読んでいるのです。

それを発音で表すと“ lun ”（ルン）。

中国では、この場合（『論語』の「論」）だけ、お尻を上げた読み方をします。

「倫」は「倫理」の「倫」、意味は筋道。そこに集まる仲間という意味にも広がっていきます。

（『論語』の「論」を）“ lun ”（ルン）と読むときの気持ちは「倫理道德」の「倫」という意識で読んでいます。ここをご理解ください。

『論語』の「語」について説明します。

漢字の音は大きく分けて二つの系統、<sup>かんおん</sup>「漢音」「<sup>ごおん</sup>呉音」があります。その他にもありますが、大きく分けてこの二つです。

我が国に中国語が入ってきた時代や、発音が入ってきた順によって違いますが、それらはごちゃ混ぜになって「漢音」で発音したり、「呉音」で発音したりしておりました。

それはいかん。交通整理しようと、平安時代に菅原道真がふたつを分けようと言いまして、仏教系は「呉音」で発音し、中国系の漢籍関係は「漢音」で発音しようということになりました。

そうしますと「語」を「ゴ」と読むのは仏教系の「呉音」。「漢音」では「ギョ」と読みます。

（さきほどの「論」“ lun ”（ルン）は「漢音」です。中国人は『論語』を「ルンユイ」と言います）

「倫理道德」の「倫」の意味で読みますから、「ロン」とは読まず「リン」。

「ゴ」は漢音で「ギョ」。

『論語』は「ロンゴ」と読まず、平安時代の日本では「リングョ」と読み、その後ずっと、江戸時代もそう読まれました。推定ですが、おそらく明治の中頃まで、そう読んでいたと思われる。

ところがその後、「リングョ」という読み方が消えてしまい、今日のように「ロンゴ」という読み方になりました。

音の変遷は認めましょう。しかし、かつての日本人は「リングョ」と読んできた。なぜか。その理由を心得て、『論語』に接していかれたら良いかと思います。

それでは、講義に使うテキストについて、簡単に説明します。

### 【論語指導士養成講座 テキスト】

#### 『論語のころ』 加地伸行（講談社学術文庫）

これは大きく章を12に分けて論語を述べています。基本的なテキストとして、章立てに従ってこの講義を進めていきます。



#### 『ビギナーズ・クラシックス 中国の古典 論語』 加地伸行（角川学芸出版・ソフィア文庫）

中学生のために書いた本。孔子の生涯も述べています。

全体を早くつかむにはこの本かと思います。



『論語 増補版 全訳注』 加地伸行（講談社学術文庫）

『論語のこころ』では100ほどの引用ですが、論語は全体で500章ほどです。

この本は全部掲載しています。完全な索引をつけていますから、一文字からでも元の文を引き出すことができます。



『子や孫と読みたい日常語訳 be ポンキッキーズの論語』 フジテレビ KIDS（産経新聞出版）

フジテレビ KIDS が編集した本で、論語を勉強なさったあと、お子さんやお孫さんに教えるときに有効だと思います。



我々は、これから『論語』を勉強するわけですが、『論語』を学ぶということは、それにとどまることではありません。

「教える」ことを、もう一つの大きな目標としていただきたい。

教えるためには自分で学ばなければなりません。学べば、それを人に教える。それはいいことです。

ですから、みなさんはこの講義で『論語』を学ばれた後、どうか若い人達に、幼児達に教えていくことを目標になさってください。

以上で『論語』ということばの読み方、意味についてのお話を終わります。